

# 鳥部山物語

とにかくに常ならぬ物は此の世なりけり。こゝにさいつころ武藏國のかたへに、物まなぶさうさなむありける。そのつかさなながしの和尚とかや聞えし人の御弟子に、民部卿といひしは、容色いときよげに心のねざしふかく、我が家のことならぬ、史記などやうのかたき巻々をだにかたかたにかよはしよみ聞え給ふれば、こと人よりもすくよかにおほえ給ひ、かたはらちかくめされて年ごろつかへまつりぬ。つねはたい松風にねぶりをさまし、谷水に心をやりて、ふかきのりの水上を尋ね、窓の螢のむつび、枝の雪をならして、法の燈をかゝげつべきささらあればとてかたみの人もいともてなすなるべし。さればそのころ九重に何のみしはとかありて、國々よりたとき僧たちのまわりつとふことなむ侍りける。此の和尚もその數にめされてのほり給ふべきさだまりければ、かみなかまも旅よそひとてのしりあへり。ころは夏たつはじめなれば、木々の梢もまげりあひ、庭の千草も色をへて、いとすしげなる宵のまの月もやがて草葉にかくれ、武藏野の名残おぼえて、むらさきのゆかりあれば、あとの事などなにくれといひこしらへぬるうちに、短き夜半のうき枕、むすぶともなきうたゝねの夢を殘して明けはなれむとする頃あづまの空をたちて日數十日あまりに都になむつきぬ魂何事もおとろへたる世といへど、猶九重のかみさびたるさまこそこよなうめでたけれ。かく

てほどへぬれば御祈の事はてぬれど、猶かへるべきほどもゆるぎなければ、その事となく月  
日を送りける程に年もかへりぬ。空のけしきなごりなくうらゝかに、雪まの草もあをみいで  
ゝ、おのづから人のこゝろものびらかに、まいて玉をまける御かたがたは、庭よりはじめ見  
所おほく、みがきましぬるありさま、まねびたてむもことのはたるまじくなむ。いつしか都  
ちかきよもの山のは霞のよそになり行くころは、まだ見ぬ花もおもかけにたちて、おなじ心  
の友どちとうちつれ、北山の方へとこゝろざしける道のもとに、老いたるわかき、たかきあ  
やしき、行き來る袖も色めきあへる中に、さわやかなる車かたへの木蔭によせてつきまたが  
ふをのこなどさしよりつゝ、「いとをかしき花のけしき御らんせよ。すみれまじりの草もな  
つかしく」なときこえければ、おり給へる、よそはひ、年のほどまだ二八にもたり給はぬほど  
なるが色々染めわけたる衣、いとなよやかにきなして、ながめ給へるやうだいかしらつき  
うしろでなどこの世の人とおもはれず。あてやかなるさまはかりなし。民部ほのかに見て  
しより、そいろに心まどひて、かへさのあともまたはしきまでなむみとれたるを、ともなふ  
人々も、めとがむるほどなれば、さすがに人のいひおもはむもあさはかなればと、心にこめ  
て立ちかへりしより、おもかけにのみおぼえて、晝はひめもす夜はすがらになげき明し、今  
は心もみだれ髪のないにもあまる戀草は、つむともつきぬ七車の、又めぐりあふ事もやと、  
いたらぬくまもなくまどひありきてもとむれど、ひとりこがるゝすて舟のさをさして、いづ  
ことをしふるよすがもなければ、むなしく立ちかへりけるが、四條の坊門とかやうちすぐる

に、公卿のすむ家と見えて、おくふかく木立ものふり、なにとなくなつかしくおぼえければ、門のかたはらにさし入りたるに、かたちいとたぐひなきちこの、梅の枝に蝶鳥とびちがひ、からめきたるをうちきて、散りすぎたる花の梢をつくづくとながめて、

「移るひてあらぬ色香におとろへぬ花も盛はみじかゝりけり」と口ずさみながら、そばなるかうらんにそとよりかゝりて、つらづあつきたまへるさま、はださむさまでなむおぼえける。つくづくとうちまもれば、夢にもせめてとこひまたひし、北山の花のえにし露まがふべくもあらず。むねうち騒ぎて、猶立ちよりければ、見る人ありとくるしげにて、やがてまぎれ入りぬ。これやいかにとまばしは立ちやすらひ侍れど、われのみまれる夕暮の鐘のひびきもつれなくて、はや日もくれぬれば、いつまでかくてもと、たどるたどるうちかへりぬ。今はひたすらやまひの床にふして、和尙につかへ物する事もをこたり給ふれば、いそぎくすりの事などとかくさたし侍れど、いさゝかもまゐるしなし。雨まめやかにより暮したる夜のいと物さびしきに、年比つきまたがひしものなむありしが、なやめる枕にさしよりさこえけるは、「過ぎにし花のゆふまぐれはのかにかげをみる月の入り給へる空、くはしくまれるもの侍り。何がしの中納言とかやいへる人の御子なり」とそいろにかたるをうち聞きて、おもき枕をもたげ、「いかにその人の事いひよるべきよすがやあり」と尋ねければ「さればとよ、その住み給ふ東にさゝやかなる家の垣に、苔むし軒にまのぶまじりにおひしげりて物わびしげなるを、すぎがてにそと見入り侍れば、あるじ六十あまりにもや侍らむ、埋火のもとに、手のうらを

うちかへしかたむきむけるを、よくよくみれば、はやうよりまれる人にてなむ侍り。さしよ  
りてこしかたの事どもうちかたらひしに、かの君の事までとはずがたりしいで、いとねも  
ごろにもし侍るぞや。御なやみもをこたり給ふほどはまばしかれの家にたちこえ給ひて、  
かりにもすませたまはら、玉だれのひまにも御心を傳へ給ふほどの事はなどや神なからむ  
とぞそゝのかし侍れば、民部うちうなづきはゑみてゐたる所に、これも和尚にまたくつ  
かへものする式部といふものさぶらひ来て、「なやみいか侍る。かくのみこもりては氣も  
つかれ、いと心もむすほいれなむにいづくにもあれざるべきやひとつもとめて、心をもな  
ぐさめ給へかし」となれてもきこえければ、うれしとは聞きぬたれとあわたれたるわざはい  
かにおいらかにもてなし、「さればよ、みづからもさはおもひながら、和尚の御心のはかり  
がたさに」とまみいとたゆげになれば、「いかにあしくはおぼし給はむ。きこえ上げ侍らむ」  
とてそのまゝ、たらいでぬ。とばかりありて又まうで來り、「あらましの事きこえ侍れば、そ  
の心にまかすべきよしのためひて侍るぞ。はやく人して宿の事ものし給へ」といとむつまじ  
くかたらひおきて出でぬ。民部うれしさに、すこしははるゝこゝちして、具足とりまたゝめ、  
かのよもぎふのやどへたちこえぬ。あるじいともてなして、日數ふるまゝにたがひに心おか  
ずなりにけり。又かの翁が子に、年いとわかさが、情あるものにて、つねに寄り來てなぐさめ  
侍るを、ある明がたかたはらにまねきて、はやくの事どもうちかたらひければ、をのこもい  
とあはれと思ひてきこゆるやう、「やつがれこそその御父なりける人の御もとへ年ごらま

りなれて、よくよく去り侍れ。かの兒の御事はふたりの中にたゞひとりにて、こよなうかしづき給ふなり。御名をば藤の辨と申し侍り。御かたち世にこえ、御心ざまも人にすぐれ給へれば、父母かぎりなくいとほしみたまひ、おぼろげにてはとへも出ださせたまはず。あけくれはたゞふかき窓のうちにて、和歌の浦なみに心をよせ、手ならひなどのみこと、し給ふぞや。やつがればかりぞよりよりはとぶらひきこえて、つれづれをもなくさめ侍る。ひたすらにおぼしたまふもいとほしく見たてまつれば、いひよりてこそ見はへらめ。うけひきたまはむははかりがたけれど、水々きのをかのかやはらなびくばかりに、御心づくしのほどをもつげ去らせ給へ」ときこえければ、民部かぎりなくうれしと思ひていとかうばしきみちのく紙の、すこし年へてあつきがきばみたるに、

「過ぎがてによその梢をみてしより忘れもやらぬ花の面影。月の夜も汐のひるまも、波風のたちむにつけてかわかぬは、小島の蟹の袖ならでも」などかくかすさびたるを、かのをのことりて、その日の暮れかゝる程に、西の家にまかりけるに、人々珍しみあへりて、世の中の物がたり、このごろある事のをかききもあやしきもこれかれうちかたらひ侍るに、君はいと心にく、秋の哀おぼしめし給ふにや、白さまきしに荻す、きみだれあひたる繪を、になくかゝせおはしまし給ふ。さしよりて「いかに御筆のあとはわがらせ給ふにや、このほどはさる事ありておとづれもきこえ侍らず」などいひぬたるに、人々御まへまどきたるほど、れいの文とりいで、「かゝる事はいひ出でいひもさすさがくるしき事ながら、せちなる思になやみ給

ふもいとほしく、又あながちにたのまれ侍るもいなみがたさに」とて、はやくの事どもくはしくかたりきこえけれど、たゞかほうちあかめて、とかくの事もたまはねば、ことわりとはまりながら、「人のかくまで戀ひかなしみ給ふ文を、いかでかむなしくはすて給ふべき。情なのわざや」とかきくとさければ、つくえのかけにすこしおしひらき、まりめにそとみやり給へるを、ついでよしと思ひて、「たゞひとことの御かへしを」とせめ聞えければ、「たゞいつはりの人の世に、行くへもまらぬあだ人の」ともてはなち給へるを、とかくいひなぐさめけるうちに、とより來る人あれば、さらぬよしえてその夜はむなしく立ちかへり、ありし事ども民部にかたりきこえければ、いよいよ空になりて、「猶しもきこえさせよ。たゞ一も七のこの葉だにあらば、かぎりあらむ道のつとめにもいかばかりうれしかるべき」などびかふとにせめきこえければ、又たちこえて、「ひと日のあからさま事をば、いかおぼしたまふにや。人づてのみのくるしさはとて、みづからさへうらみ給ふなみだの雨に、よその袂も所せくこそ。あまりに人のつれなきも、後は中々わたとこそなれ。御歌のかへしばかりは」といゝるにすゝめければ、「われも岩木ならねば、人のあはれはまりながら、うき名もさすがつゝましくこそ」とて、

「見てしより忘れもやらぬ面影はよその梢の花にやあるらむ」とばかり手ならふやうに書きすさびたるを、やうやうこひとりつゝ、いそぎ立ちかへり、「御返し」とてさし出だせば、とる手もおそしとくおしひらきてみれば、ふくよかにくづしかきたるが、鳥の跡のやうに

て、わかわかしうまくもつゞけやらぬほど、おひさま見えていとつくし。されば猶たへがたさに、またおしがへして、

「散りもそめず咲きも残らぬおもかけをいかでかよその花にまがへむ。たゞおほかたの色香ならぬば、まがふべくもあらぬを、いかなる風のつてにても」などさまさまにかきくたきけるを、中だち又たちこえとかく聞えければ、此の歌をくりかへしながめ給ふが、「よしや人のもりさかば中々なれど、とにもかくにも」とて、

「耻かしの杜のことのはもらすなよつひにまぐれの色にいつとも。何事も何事もあしからぬやうに」などさここえ給ふもいとほしく、民部にとかく聞えければ、なやみいつしかをこたりながら、ぬぬなはのくるしきものは、忍の浦の見るめまげくて、日ごろを過ごし侍りけるが、いかなる人めまぎれにや神、ある夜ひそかに兒の住み給ふかたへまのび入りたるに、わざとならぬ句まめやかにうちかをりて、いける佛の御國ともいはまほしきに、妻戸の少しあきたるよりみ入れたれば、花紅葉散りみだれる屏風ひきまはし、かすかなる燈のもとに数々の草紙ひろげて、心まづかにうちかたぶき給へるに、こばれかゝりたる髪のはづれより、にはやかにほのかなるかはばせ、つゆをふくめる花のわけほの風にまたがへし柳の夕げしき、かの北山にて見初めしは、猶ことの數ならずおほえける。おしわけて入りたるに、のどやかにもてなしたるけはひ、見はてぬ夢のこゝちまながらかたはらによりそひつゝ、つらきにもうれしきにも、なみたまづさきだちて、「ありしなごらのこゝろづくしはおしはかり給ふ

も、猶わさくや」などおしのごひきこえけれど、人はいとそむきてはぢらひ給へる顔の色あひ、ものによそへば露おもげなる秋萩の、枝もたわゝに咲きみだれたるよそはひ、いとほしくもうつくしなどいふもおろかなれば、うつし心もなくなりて、日ごろのうさのかざりもあふ夜のうちにでかたらひわたるに、なにのつらさにか、別れをいそぐ入聲の鳥もはや聲々にうちまされば、おのが音につらさわかれとうちわびてひきわかれぬるさぬぎぬの袖のなみだも所せくおぼえけるに、有明の月のかたみがはなるも猶かきくらす心ちして、いとなつかしき袖のかをりも、今宵はつねならぬ心ちして、心ときめさせらるゝに、屏風すこし引きそばめたるに、やをらおしやりてみれば、はやいたうなきえをれ給へるなりけり。ねんじあへず、うちなかれつゝ、かたはらにそひふして、「これやいかなるすくせのなすわざならむ、御心のまことしあらば今のなさけなわすれ給ひそ」とよりかたらふをりしも、月影のはのかに南の窓よりさし入るを見て、民部、

「いかばかり月には影の暮はれむ曇る夜はさへ忘れやらじを」とさぐりもよゝととゞめがたきを、辨の君もいとまめりたるまゆおしのごひ、とばかりみやりて、

「いかにせむ涙の雨にかきくれてまたはむ月の影もわかねば。おなじかざりのいのちならずば」といのちにかへてもまばしとゞめまほしき今のわかれなり。さればむかしがたりにも、「千夜を一夜に」といひしもさる事なり。まいて秋ならぬ夜のみじかきは夢よりも猶ほどなくて、こと葉を残す鳥の音にいと心も空になれば、たがひに手をとるかかはしほどは雲の



にと契りおきつとなみだとともに立ちわかれぬ。やがてあふ坂山こえかゝるも、またいつの世にとなげかし。

「おもかげよいつ忘れられむ有明の月をかたみの今朝の別れに」とひせかへれば、君もたぐひなきあはれに、

「かぎりとして立ちわかれば大空の月もや君のかたみならまし」とたがひにかへりみがちにて立ちわかれぬ。其の後はなほ浅からぬ契となりて、よりよるとひかはしぬるほどにやうやう春もくれぬ。折ふしのうつり行くは世の中のならひなれど、今更かへうき夏衣の日もたちかさなりて、はやあづまのかたへおもむくころにもなりしかば、故郷のつとにとて錦をかざす花衣の色めきあへる中に、民部ひとり人まれぬ物思ひにおき所なき袖の露、紅の千入も浅きまでになり行きけれども、といまるべき道ならねば、ともにいでたついとなみの中にも、今一たびまめやかにうちかたらふこともがなと、おもひわすれぬほどに、はやあすなび都の地をたちさるべきよし事さだまりければ、今宵ばかりのあふ瀬に、涙の淵もせきとめがたく、つひにかゝるうきにもならはで、そいろごとして物もおぼえぬさまなり。中だちとかくこしらへて、廿日あまりの月のやうやうさしのぼるころ、人をまづめてれいの妻戸よりまのび入りければ、五月まつ花たちばなのにはひならねど、

「いつとなき世のはかなさを思ふにもいかゞ越えうき逢坂の關」。やうやう日數ふるほどに武藏國につきぬ。都には立ち別れ給ひしより、せめて枕のうつり香も、人にそひぬる心し

てければ、そのひと日二日はおきもわがも給はで、袂もくつるばかりなきかなしみ給へど、身より外にはたれかわはれともいひあはすべき。すこしなぐさむかたとは、かの中だちせしをのこばかりぞたえだえとひ来て、ありし事どもひそかにうちかたらひ侍りしが、それさへいつしかうとくなりて、事とふよすがもなければ、ひとり心にこひかなしみて、おきもせずねもせぬ床に夜をわかし、晝は閨のうちながらも、そなたの空をながめやり、吹さくる風のおとづれもいとなつかしく、山の端近く出づる月のくま澄みのぼるにも「月には影の」と詠め給ひしのおもかけひしと身にそひて、戀しうのみおもひまされりければ、かたみも今はわだなれとうらめしき中にもさすがに又またはれて、

「詠めやる夕の空ぞむつまじきおなじ雲の月とおもへば」とひとりごちてなどかうしおも心よわきさまにと、人めをおもひかへせど、いやまさりにのみくるしければ、つやつや人にも見えたまはず。たゞこもりぬがちなるを、父母はいとかなしき事におもひて、神佛にいのり、かぢなごさまま行ひ給ふれどそのまゐるしなく、たゞあながちに物思ひ給へるけしきにて、をりをりむねせきあげて、いみじうたへがたげにまどひ給ふ。人々いかにと心やましくおもへる中に、この兒のめものとなるもの、御枕によりそひつゝ髪のかみなで、「わなづつゝなや。いかにさは心うさめみせ給ふぞ。まだ二葉のむかしよりおよすげ給ふまでおほしたてまゐらせて猶榮えゆくするのめでたきをみたてまつり侍らばやと思ふにぞあすえらぬ命もをしまれ侍る。されば何事にもわれ、御心にわらむほどの事、我にはへだて給ふべきかは。

かく日を経てなやみ給ふ、かつは御心よわさにこそ」といりいろになぐさめければ、すこし  
枕をもたげいとくるしげなる聲してさこえ給ふは「その事は我もいさゝかおろかには思  
ひ侍らす。心にあらむほどのこと何かはまばゆかるべきなれど、いひ出でもそのかひあら  
ばこそ。とてもあへなき事ゆゑに、人のためうき名とり河のよしやなみだにまづみはつとも  
と、ふかくねんじて日ごろは過ぐし侍りしが、今は玉のをもたのみすくなく侍れば、こゝろ  
のうちにいはではてなむもよみぢうたてしさにかたり侍る。あなかしこ。ならむあともゆ  
めもらす事なかれ」とて、あひそめしむかしよりの事どもうちかたりつゝ、かぎりなくむせ  
び給ふ。いとよきなき御心に、かくまで思し給ふ事のふしぎにもあはれにもおぼえて、と  
もになみだを落しつゝ、「さることゝ、こゝをかねておもひ侍れ。かしくぞ御心をもとひたて  
まつれ。此の世のなかになきならひかは。さまざまつゝ、み給ふべき事にもあらざめれど、御心  
よわさにこそかくやみくづはれ給ふなれ」といそぎ父母につげさこえければ、こよなうけい  
めいのたまふやう、「さてもいかなる物はぢにか、さまざまは心にこめけるやらむ。おろかの事  
よ。その事ならばこゝにむかへむになどかはかたからむ」とて「人してはたがふ事こそあれ。  
そこにはいそぎあづまへくだりて、なしたてまつれ」とおほせければ、ゆめのもゝとうれし  
きことに思ひ、又御枕にたちより「父母の仰事なむかうむりて、その戀ひまたひ給ふ御ゆく  
へたづねに唯今おづまへくだり侍るぞ。いそぎなしたてまつり侍らむ。まばしとおぼし給ひ  
て御心をもなぐさめ給ひて」などいさめおきて、夜を日にくだりつゝ、かの住みかをたづねも

とめてあかひをこひ、民部にたいめして、「かうかうの事侍るをばいかにあはれとはおぼえたまはずや」といふよりまづなみだにむせびければ、さく心ち物もおぼえず、まばらくありてさこゆるやう、「さればよ、さる事侍りしを、よろづ世の中のつゝましさにあるくいひ出づることのかなはでうちすくし、そこはさへまらせ侍らざりしを、今かうたづね來り給ふ事のおもてぶせさよ。我も都を出でしより片時わすれまゐらす事は侍らねど、誰も心にまかせぬわたらひにて、いたづらにけふまでは過ぐしつれ。せちなる思ひのよしきくもいとたへ難く侍り。いかにして逢ひ見侍らむ」とてやがて立ち出で、ひかしなやめる比、いとまめやかになぐさめける同じとものもとに行きてたばかりやう、「年ごろ心づくしにおもひおきつるゆかりの者、此の程都ちかき所まで上り侍るが、はからざるに病にかされて世の中もたのみすくなに寄りゆくまゝに、そと聞えあはすべき事のあれば、いのちのあらむ程いま一たびとみにつげこし侍り。あはれそこのはからひにて、三十日あまりのいとまたまはりてたゞ一め見もしみえはや」となげくを、「いかでかたるべき」とて、やがて和尙へきこえ上げれば、「ことわりなれば」とて、御いとまたまはりぬ。ふたりのものいとうれしき事におもひて、時しも秋風のみみだもよほす音づれに、虫も數々なきそへて、草のたもとも露ふかく、月をしわくるむさしのを、またまのゝめに思ひたちぬ。やうやうゆけば、ふじの高ねにふる雪も、つるる思によそへられつゝ、

「さえがたきふじのみ雪にたぐへても猶長かれと思ふいのちぞ」などむねよりあまるこ

といもくちすさみつゝもて行くほどに、清見が關のいそ枕なみだかたしくそでのうへは、とけてもさすがぬられぬを、海士のいそやにたびぬして、なみのよるひるといへるも、わが身のうへにおもひえられて、おほかたならぬかなしさまた何にかはにるべき。

「中々に心づくしに先だちて我さへ波のわはでさえなむ」。わりなさのあまりなるべし。日もやうやうかさなるまゝに、つち山といふうまやにつきぬ。あくる空は都へとこゝろさしよろこびあへる中にも、いと心やまじきに、「京より」とて文もてきたり。おはやいかにとむねうちさわぎで、とくひらき見れば、「なやめる人日にそひよわり行きて、きのふの暮れかゝるほどになむたえ入り侍りぬ」とあるをみるにめくれ心まどひて、これやいかにと夢のわたりのうき橋をたどる心ちなむえける。民部なみだのひまなきにも、「今一たびのたのみにこそはるばるたどりこしに、ひと日二日をまたでさえにし露のはかなさよ。かゝらむとてのあらましにや。おなじかぎりのとはなげき給ひにけむ。さればわれゆゑむなくなりし人を、いまはのさばにさへひとめ見給はぬ、そこの心のうちおしはかるもうたておぼゆ。むつきの中より見をなはしたまふ人なれば、いかばかりあへなしとおもひ給はむ。我もこれまでたちこえしうへは、いそぎ都へのぼりてたよりなくなげき給はむ父母の御心ごもなくさめ、又なき人の後のわざをも、いとなみ侍らばや」ときこえければ、「ありがたき御心にこそ。かくまでものし給ふうへは、なにしうらみか侍らむ。たゞなき人の命のもろさこそとにもかくにもせむかたなけれ」とてまたなきまづみけるけしき、いとわりなしともわりなし。民部も

たえだえはならちかみて、「おくれさきだつはかなさは大かたの世のさがあれど、かゝるためしこそきゝもならはね」とうちなげきつゝ、あくるひの暮れかゝるほどにみやこになむつきぬ。父はまいて母はおぼろけの人には見えたまはぬを、きちやうのとまではしり出で、民部が袖にすがり給へば、めのとなどは、かたはらにたれふし、「つらし、心うし」となげく聲、こゝろにあらぬのびかたし。やゝありて、父の卿めのとなるをのこにむかひてのたまふやう、「ひとひこゝを出でしより、すこしは心もなぐさむげにて、なやみもいさゝかかろらかに見えしが、また日にそひておもり行き、はや樂など物すべきたのみもなくなりて絶え入りけるを、よびいけなどまげれども、なさげなくむかしがたりになしゝなり。今はのきは心の闇、母がなげきのやるかたなさ、たいおしはかれば、なげきてかへらぬみちなれば、鳥部やまのかたはらにたいひとりのみおくりすてゝ、むなしきけふりとのぼせしは」とて又むせかへり給ふを見て、人々聲をさゝげてさとなきにけり。民部の君ひとまなる所に入りみれば、むなしくぬぎすてし衣、朝夕手なれしてうとなどもさながらのこりて、いと涙のつまとなりぬ。またかたはらを見れば、なれたる扇に「こひむなみだの色にゆかしき」などいへるふることども数々にかきて

「日影まつ露の命はをしからであはでさえなむことの悲しさ」とかける筆のわとも、いたちよわりたまへるをりぞとおぼえて、もじもさだかならずみゆ。民部むねふさがりありしすがたのつとそひて、いつの世にわするべくもあらず。今はたゞをしからぬいのちなき人のた

めにすてむ事をひたすらにおもひこめけり。さればうきにたへぬなみだ川、ながれてはやき日敷もけんは七日になりぬとて、父の卿めのとなどありし所にたどり給ふれば、民部もおなじくまうでけるに、鳥部山のけぶりそれとわかぬといとむつましく、あだしの、露あはれと見るにつけても、君があたりの草の葉におもひ消えなむいのちのほども、中々今はうれしくて、

「さきだちし鳥部の山の夕けぶりあはれいつまできえ残れとか」。父の卿、とりあへず、  
「さきだちて消えし淺茅が末の露本の雫の身をいかにせむ」。さて民部はさきだちてはやくさんま  
いのかたに行きて、むなしきまをみるにも、先なみだにくれてまばしものもおぼえず。  
やゝありて花などたむけつゝ、心まづかにねんずまをはり、いきたる人にものきこゆるやう  
に、「さてもまばしをまたで世をはやうし給ひしことのうたてさよ。いかばかりか我をつら  
しとおぼすらめ。たれも心のまゝならねば、此の世のえにしうすくとも、こゝ世はかならず  
おなじはちすのうてなにとおもふあまりつみふかきまよひなれど、世々を経て思ひなれに  
し事の、今さらあらためがたければ」などうちなげきて、ふところにありしまもりがたなを  
ひそかにぬきそばめ、いまはかうと見えしをそばなる人はやくみつめて、「こはいかに」とい  
だきとむれば、中納言をはじめ人々とりつき、まづ刀をばからうじてうばひ取りぬ。中納言  
はさきだちて民部にのたまふやう、「なきが事は今はかひなし。そこにもなくなり給ひなば、な  
きかなげきにとりかさね、またもうきめ見せ給ふか。御こゝろさし侍らば、あとのわざいと

なみ給はむこそ消えにしものゝつみもかるからめ」とまままにいとゞめ給へば、ほいも  
とげず。それより武藏野へもかへらず、北山のかたはらに柴の庵を引さひすびて、墨の衣も  
色ふかくねぬ夜の夢もさめけるにや、

「あらぬ道に迷ふも嬉し迷はずばいかでさやけき月をみせしや」と詠めて、まばしはこゝ  
におこなひしが、ゆふべのかねのうちきそひて、またいつちへかたどり行きけむ、おぼつか  
なき事にこそ。

## 鳥部山物語

終